フィレンツェ・インノチェンティ捨て子養育院の
創設初期における子どもたち

“Ora pro nobis peccatoribus, ...”
「ツミビトナルワレラノタメニ祈リタマエ...」

前之園 幸一郎

はじめに

フィレンツェの組織物商人ギルドは、多くの裕福な個人や中世人たちによる「キリストの貧しき者」たちに対する慈善的な遺贈をもとに、同ギルドの莫大な資金を投入してインノチェンティ捨て子養育院（以下、インノチェンティ養育院と略称）を1419年に創設した。インノチェンティ養育院の実際の活動は、1445年から組織物商人ギルド（図4）の管理・運営のもとに開始されるが、そこには開設と同時にジッタテリ（gittatelli）と呼ばれる捨て子たちが押し寄せた。

さてそれでは、どのような境遇の子どもたちが、どのようななかたちでこの施設に捨て子として収容されたのか。出生後間もない新生児たちはどのような状況のもとで遺棄され、親たちはその折りにわが子にどのような態度を示したか。本稿では、残されている当時の記録からインノチェンティ養育院開設の初期における子捨ての特徴的な諸側面について明らかにしたいと考える。
I 古文書館「収容児記録」における子どもの状況

フィレンツェのインノチェンティ養育院の付属古文書館には、創設以来の『乳母と乳児』と呼ばれる捨て子受入れ基本台帳が保管されている。預けるためにここに乳児を連れてきた人物は、養育院職員による面談でねよりはまり聞き取られた。その史料には、この面談から明らかになった子捨ての背景の事情や動機、子どもが身に着けていた持参したもの、乳児の健康状態などが、書記の手によって克明に記録されている。基本台帳中にしばしば見られる「父親が誰であるかを言うわけにはいきません」という養育院まで子どもを伴って来た人間の言葉は、インノチェンティ養育院の職員たちが遺棄される子どもの身元を知ろうとしてこまかな質問を繰り返したことを暗示している。子どもを係員に渡して逃げるように立ち去る者や、姿を見られないように用心してインノチェンティ養育院玄関入口に子どもをそっと置き去りにする者も多かった。これらの人々については、書記が受けたその場の印象や、新生児が放置されていた状況などが詳しく書き留められている。

受け入れられた子どもが洗礼を授けられているか否かは、インノチェンティ養育院にとってはもちろんのこと、その子の両親にとっても重要な問題であった。洗礼を受けることなく死亡するようなことになったならば、その子どもは永遠に救われない暗黒の地獄に落ちると信じられていたからである。そこで、まだ洗礼を受けていない捨て子は、少量の塩を入れた布の小袋を首から吊るしていった。それは洗礼をお願いしますというサインであり、養育院に対する親たちの必死のメッセージであった。

そのような子どもは、フィレンツェのドゥオーモ（大聖堂）、サンタ・マリア・デル・フィオーレの正面にあるサン・ジョヴァンニ洗礼堂で、もし健康であれば数日以内に、瀕死の状態なら即刻、洗礼が授けられた。書記は、子どもの家庭や出身についてわずかな手がかりでさえもつかもうとして、親や子どもを連れてきた人物から得た情報、子どもを受け入れた時の日時、子どもの状態、衣服の様子などについて、懸命に記録を残している。後になって親が子どもを取
り戻しに来るような場合に、その記録は役立つ。また後々、わが子を確認できるようにと目印になるものを子どもに持たせたり、紙片に走り書きした書き置きを衣服の縫い付ける親たちもいた。イノチェンティ養育院が開設された最初の年の10月に、キリスト像を目印のために持たされた幼児の例が記録されている。ちなみに最初に捨て子が受け入れられたのは1445年2月5日であり、その日は聖女アガタの祝日であった。そのために、受入れ第一号のその女の子は、アガタ・ズメラルダと命名された。

子どもたちは、誕生直後の新生児や、慌てて連れられて来た例外的な場合をのぞけば、暖かくしてやろう、寒くないようにとの親たちの配慮から、ぼろ布ではあれ、衣服を着せていた。イノチェンティ養育院の第2番目の収容児として記録されているアレッサンドラ・ズメラルダは、ごめごめした「ロマーニョ風のおんぼろ着物」にくるまれ、シャツを引き裂いて作ったスワドリング（おむつ）を添えられて、ここにやってきた。その2週間後に、ズメラルダは養育院の外部の乳母に預けられる。その乳母に対して、イノチェンティ養育院は「新しい羊毛の服一着、新しいスワドリングの布、8枚の上等の着物、古いマント一着」を与えている。

さて、開設当初のイノチェンティ養育院への捨て子受入れの手順はどのような過程をたどったのだろうか。まず、イノチェンティ養育院に収容された子どもたちの90%は、分娩後3時間から生後3週間くらいまでの新生児であった。子どもたちは、外部の乳母に預けられる前に、養育院内に待機する15名ほどの常勤の乳母によって授乳された。外部の乳母は、そのほとんどが農村部に居住する農家の女たちであり、新生児たちは養育院内で1ないし2週間を過ごしてから、田舎に暮らすこれら外部の乳母のもとに預けられた。そして離乳の時期の来る18ヶ月から24ヶ月くらいまでを乳母の家で過ごした。その後、彼らは、乳母の家に留まったり、養父母のもとに暮らし、4歳になるとイノチェンティ養育院に帰された。そして養子先を探すために、子どもたちは養育院で数年を過ごした。

たとえば1449年には、1445年に最初に受け入れられた乳児集団中の生存して
いる子ども（fanciulli）たちが外部の乳母のもとから養育院に帰って来た。1449年のインノチェンティ養育院収支原簿は、その子どもたちを養育院に再び迎えるための準備の記録を残している。それによると、その子どもたちのために一足16ソールディする靴81人分が購入されている。

通常、養父母のもとから帰って2年以内に、男の子は徒弟として養子に出された。女の子は女中や家事手伝いとして普通の家庭に斡旋されたり、紡績物産業に関連する労働に従事させられた。多くの少年少女たちは、昼間は徒弟として、あるいは家事手伝いとして外部で働き、夕方になると帰りできて養育院内で夕食をとった。男の子に対する養子縁組ならびに徒弟契約においては、商売や技術についての基本的訓練とその習得が重要な項目とされたが、それと同様に、読み書きならびに礼儀作法の教育が重視されていた。

ところで、インノチェンティ養育院に子どもを預けるとき、その両親はどのような気持ちを抱きながら、わが子を係員に手渡したであろうか。親たちは、感情的な痛みを感じることなく冷酷無情に子どもを人手に渡したわけではなかった。養育院開設当初の1445年に捨て子にされたアントーニア・ジネーヴラは、書き置きの紙片をたずさえていた。この女の子について、養育院の書記は受け入れ台帳に書いています。「一人の少年が彼女を連れてきた。その少年は、その女の子の名前も、彼女が誰の娘であるかも言うとはしなかった。その少年は、彼女の子の名前がアントーニア・ジネーヴラであり、その子がその子を十分に養える父親と母親の子であることが述べられていて。その両親は、この子に神と聖マリアの慈愛を祈っている」。

同様に1445年5月にピエーラ・ドメニカをインノチェンティ養育院に連れてきた人物の言葉が記録されている。「この女の子は先週の金曜日（4日）に生まれました。彼の母は言った。彼は、書き置きの手紙を持って来ていた。それによると、この女の子の父親はヴェスパシアーノ・ディ・セール・ヤーローであり、今、この父親は牢獄にいる。その手紙は、その女の子が大事に育てられれば、父親がかならずその子を引き取りに行き、必要な経費の支払いを行ないますと述べて、その子のことをよろしくと訴えている」。しかしこの
約束は果たされなかった。その後、5年間経っても親は引き取りに来なかったからである。

1445年10月、ボッツォラーティコ（地名）から、ぼろ布一枚をのぞけば裸同然の姿でルチア・イノチェンティが養育院に連れて来られた。連れてきたのはその子の祖父に当たる人物である。彼の言葉を書記は書き留めている。「この男のリベラータという娘から、今朝早くこの女の子が生まれた。相手は、ボッツォラーティコの近くに住むジョヴァンニ・ディ・ドゥッチオである。この赤ん坊は、娘リベラータのジョヴァンニに対する愛情から生まれました」。この子捨ては、若い娘の早すぎる妊娠と出産に苦慮した結果の父親の行動であることを物語っている。

イノチェンティ養育院の職員や書記たちは、連れて来られた子どもが生後何か月であるか、年齢が何歳くらいであるかを彼らの判断基準にしたがって推定した。たとえば次のような記録が残されている。「ブリジダ・イノチェンティは、生後6ヶ月から、それ以上である。すでに喋りはじめているからである。その女の子が誰の子であり、誰がここにその子を連れて来たかを知ることはできない。われわれのうちの誰もその人物を見ていないからである。物乞いをして歩いている貧民の誰かの子、あるいは施設に身を寄せている者の子だと思われる。彼女は、わが養育院入口の階段のところに泣き声が聞こえるまで2時間も放置されていた。その声を聞いて、われわれの石工ブランコが彼女を拾い上げたのである」。

本来、身分を隠すのが当然だと思われる人々が、あくまで自ら名乗っている例も見られた。1445年12月に捨て子にされたジョヴァンナ・カテーリーナは、サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会の司祭セール・アショーロの娘であった。少し年代が下るが1457年に、一人の女に伴われて女の子が養育院に連れて来られた。その女は言った。「この子はある教区司祭の娘です。しかし、彼がこの教区の司祭であるかは言うわけにはいきません。その女の子はフィレンツェ生まれであり、その母親は未婚なのです」。

親たちが病気になったり、両親のいずれかが死亡した場合にも捨て子が行わ
れた。インノチェンティ養育院に1446年3月14日に捨て子が収容された。その子をめぐるその後の経過を、書記は次のように記録している。「同月20日に、われわれのところに一人の女がやって来て、男の子を捨て子にしたと述べた。その女は、捨てられた男の子の母親が死亡したこと、その子はサンタ・フェリチタ教区に住む刀剣術ミケーレ・ディ・ベンヴェュートの息子であることを告げた」。その男の子はジローラモ・アンブロジオと名づけられた。彼の父親ミケーレは、引き取りに来るという意思を示す手がかりを何も残していなかったにかかわらず、それから8年後の1454年にジローラモを引き取った。

ためらいながら、思いあまってわが子をインノチェンティ養育院に遺棄する親の姿も見られた。1448年1月、名前を名乗らない父親が女の子を連れてやって来た。彼は「聖水盤の上にその子を置いた。その子の母親が病気でメッセル・ボニファッティオ病院に入院しているので、連れて来たと言った」。しかし、この父親は考えなおして、その日のうちに娘を引き取りに来た。インノチェンティ養育院が彼に娘を返したのは言うまでもない。

ちなみに聖水盤とは、ピーラ（pila）のことである。大理石でできた大きな容器で、新生児の体を横たえた状態で置くのに最適な床が用意されていた。本来、インノチェンティ養育院の付属教会の入口に水をたたえて置かれていたが、それがインノチェンティ養育院に遺棄される捨て子のための受付台として使われるようになった（図3）。後にルオータと呼ばれる回転式の受付口が設けられるが、それは1660年のことである。

1452年の記録によると、車引きの娘が「聖水盤の上に置かれた。その子は洗礼を授けられてアンドレアという名前が与えられた。その子は生後10ヶ月ないしはそれ以上であり、クローチェ門に住む車夫ジョルジオとその妻モンナ・マルゲリータの娘である。妻が病気でサンタ・マリア・ヌオーヴァ病院に入院しているので、ジョルジオはその娘をわれわれのところに連れて来たのである。その妻は危篤状態にあり、彼は極貧の暮らしをしている」。しかしながら、その翌年アンドレアの母親は回復し、その母親はインノチェンティ養育院に娘アンドレアを連れ戻しにきた。
母親が病気で家にいなくなると、乳母を雇う余裕のない下層階級の父親たちは、以上に見たように自分の手で育児ができなくなり、子どもを育養院に預けることになった。両親がともに病気で倒れた場合には、さらに事態は深刻であった。

1452年11月、ジローラモ・バルトロメオ、2歳が、インノチェンティ養育院に捨てられた。書き置きの手紙を持っており、それによってその子の名前がわかった。書き置きには、その子の両親と二人の兄弟がサンタ・マリア・ヌオーヴァ病院に入院したと記されていた。ジローラモはインノチェンティ養育院を経て養父母のもとに送られ、同一の養父母によって10年間養育された。養父母は彼にフリアーノという名前を与ええた。13歳になったとき、彼はインノチェンティ養育院に帰ってきた。そして、彼の父親は死亡していたが、母親が彼を引き取りに養育院にやってきた。このような貧困で苦労している片親が子どもを受け取りに出頭した場合、インノチェンティ養育院は、通常請求されるそれまでに要した養育費用の支払いを免除した。

配偶者の死去あるいは病気のために困り果てた親が、インノチェンティ養育院に短期間の養育をしてもらうためにわが子を捨て子にするという事例も見られた。これは、厳しい子育ての重圧から解放されるために、新生児をショート・ステイにして養育院で保育を受けさせることを期待する親たちが多くかったことを物語っている。親たちは、こともなげに残忍な冷酷さから乳児の遺棄を行なったわけではない。

1465年3月10日に、司祭の下働きをしているある労務者がカルチナイア（地名）から女の子をインノチェンティ養育院に連れて来た。その男によると、アントニオ・ジョヴァンナという名前のその子は病気の労務者ピエロとその妻モンタ・マリアの正式の子どもであり、彼女は乳が出なかった。彼らは絶食の暮らをしていて、上述の女の子はすでに洗礼を受けていない。ところが、その子が連れて来られた日から3日後の3月13日に、アントニオの母親が彼女を連れ戻しにやってきた。

1465年5月に、カマルドーリ（地名）において生後10ヶ月の男の子が捨て子
にされた。母親が病気で倒れたからである。父親は織り工である。この父親は
養育に必要な費用は支払うと約束した。インノチェンティ養育院は、その子の
全面的な保育のために有料で一人の乳母をその子に当てた。子どもは6歳間を
養育院で過ごして、その後両親のもとに返された。これらは、養育院の緊急な
一時預かり所の役割を示している。

母親の病気のために一時的にわが子を捨て子にするという同様の記録は、枚
挙にいとまがない。1457年5月23日に一人の女の子がインノチェンティ養育院
の聖水盤に捨てられていた。生後3ヶ月くらいだと推測されるその赤ん坊にさっ
そく洗礼が授けられた。その子は書き置きの手紙をもっていた。それによると、
その子の名前はリザベッタ・ディ・マッテオ・ダンドレアであり、母親がその
子をここへ連れて来た。その母親が病気で母乳が出なかったからである。しか
し同年の5月30日に母親が養育院まで子どもを迎えに来て、その女の子は母親
に返された。そして母親はこの時待ちわびていたと述べた。

上の例から明らかのように、ほとんどの親たちが、後ろ髪を引かれる思いで
踏み切ながら子捨てを行なった。そして事情が若千でも好転すると、子どもを
引き取りにインノチェンティ養育院に出頭した。ところが、そのような情愛深
い親たちとは正反対の親たちがいなかったわけではない。記録によると、
インノチェンティ養育院に「1452年9月18日13時、女の子が連れて来られ、聖
水盤の上に置かれた。生後18ヶ月と推定された。その子を連れて来た人物は、
それが誰の子で、名前が何であるかをたずねられるのを恐れてでもいるかのよ
うに、そそくさと養育院から立ち去った。その女の子は走り書きの手紙を持っ
ていた。それには、彼女がドモリであったので舌の筋が切断されたこと、その
後、うまく喋らなくなったことが述べられていた。この子は、オンで、狂気
じみているので、乳母には月額35ソルティが支払われることになるだろう」。
そしてインノチェンティ養育院は、情愛をこめてこの子に「かわいく、風変わ
りで、口の利けないマルゲリータ」という名前をつけた。

信じがたいほどの虐待の事例も見られる。1449年9月、「夕食を知らせる鐘
が鳴っているとき、一人の老人が子どもを連れて来た。その男は貧乏人のなり
をしていった。木槌でノックして養育院に入り、質問をされるや否や逃げるようにして立ち去った。子どもは、その様子から生後4ヶ月と推定された。その子の肋骨のあたりに切り傷が発見された。その子は9月18日に亡くなり、天国へ旅立った。彼の上に神の祝福があり、彼の両親が救されますように」。インノチェンティ養育院は、この哀れな幼子に「治療を受けられなかった坊や」（サンツァ・リメディオ）"Sanza Rimedio"という名前を与えた。

1452年4月、同様の捨て子が発見された。すなわち、「死んだ女の子が聖水盤の上に置かれていた。その子の頭部と顔面には数箇所にわたり打撲による傷があり、鼻は唇のほうにつぶれているように見えた。その子を通んできた人物の姿は見ることができなかった。今後も、それが誰であったかを知ることはできないだろう。この衝撃的な痛ましさを目にしてインノチェンティ養育院の職員たちは、その子のために葬式を行なった。書記はその様子を次ののように書いている。葬式に立ち会ったのは、「私の妻ディオノーラ、職員のモーナ・アニーラ・ディ・マーサ、モーナ・カテリーナ・ディ・モーナ・マーサ、モーナ・アントニオ・ディ・カシーノ・ディ・カセンティーノ、養育院奴隷のマリアとマーサ、それに乳母のモーナ・マッダーナ・ディ・ジョヴァンニ・バッキであった。養育院内の女の子どもたちも参列した。われわれは、女の子が葬られるのを最初から見守った。彼女に神の祝福がありますように」。あまりにも束の間の幼児のいたいけな生に対して、インノチェンティ養育院の職員たちは心からの祈りを捧げ、ねんごろ的な埋葬を行なっている。

II インノチェンティ養育院の活動内容の変化

1450年代の後半から、新生児の受入れをめぐってインノチェンティ養育院に変化が見られるようになる。子どもの養育に要する費用の支払いを約束しなが ら、子どもを預ける親が現れるからである。そしてインノチェンティ養育院も、 しだいに有料サービス施設としての性格を強めるようになる。

子どもに添えられた1457年のある手紙には、「インノチェンティ養育院には
支払いを十分に致します。それゆえ、この子がよく養育されるようにご配慮を
ぜひお願いします」と書かれている。また、同時期の捨て子が持っていた書き
置きにも「この子は、資産を持つある人物の娘です。その人物によってこの養
育院は順調に経営がいくことになるでしょう。そこで、ぜひこの女の子を大事
に世話してください」と述べられている。

この時期から、特に、インノチェンティ養育院に子どもを預ける際に、子ど
もに添えられる目印や割符が目立つようになる。それらは、子どもに持たせる
親の書き置きの手紙同様に、子どもを引き取りに来ること、養育費用の返済を
行うことなど、親の明確な意思を伝える役割を果たした。たとえば、「1459年
5月24日の夜23時に、小さな新生児が聖水瓶の上に置かれた。それを連れて来
たのは奴隷であった。その女の子は書き置きの紙片を持ち、首からコインを吊
るしていた。そのメモは、その子が今朝の10時に出生したこと、ザノービア・
マリアと命名されたこと、首の回りに吊るしてあるものは洗礼を受けた印であ
ることを述べ、この子をよろしく頼みます、養育院でも上の名前を与えてくだ
さいと書かれていた」。

親の意思をさらに明瞭に述べる手紙もあった。「私は、1461年12月9日の今
日の日付をここに記録しております。セルヴィ広場にあるインノチェンティ養
育院のメッセール・ジローラモ・ディ・サン・ジミニーノ院長様、この子は
アンプリオージオ・ミニアートです。彼は洗礼を受けました。そしてあなた様
によろしくお願いするための目印として、首の回りにピサ金貨をつけておりま
す。この子は、あなた様に義務を支払うであろうフィレンツェの市民の一人、
資産ある人間の息子です。この子が養育院に受け入れられた当日のこと、養育
に要した費用について記録しておいてください。すべて支払われることになる
でしょう」。ところが、その子は、その直後、養育院内において死亡した。

さて、セーニョと呼ばれる目印の割符を持った子どもは、養育院から外部の
乳母のもとへ送りだされるのがしばしば後回しにされた。そのことは、不注意
で不衛生な乳母による育児から一時的であれ逃れられることを意味していた。
そして、一般的には、女の子よりも男の子のほうが、後回しにされる傾向が見
られた。そこで、女の新生児の両親が養育院に率直な訴えを行った手紙が残されている。記録によると、「1462年6月11日金曜日、女の子が連れて来られ、
聖水盤の上に置かれた。その子を連れて来た人物は、手紙も携えていた。その文面は次の通りであった。 "私は誓います。この女の子は、カトリーヌ・ルクレティアという名前を持ち、裕福な人間のもとに生まれました。そこで、院長様に、この剖符を保存してくださり、この子を他人の手に渡さないようご配慮を賜りますようお願い申し上げます。このことをお心にお留めください。その時が来れば、私どもは私どもの義務を果たすつもりでおります。本日は聖バルバラの祝日です。あの子に神の愛が与えられますように。剖符として、あの子の衣服から取った一本の糸とボローニャ・グロート金貨の半分をこの手紙に添えます”」。しかし実際には、インノチェンティ養育院は、外部の乳母を選別して子どもに割り振るというようなことは行わなかった。

カトリーヌのその後についても、記録は残されている。上の手紙から一月ほど経過した同年の7月7日に、インノチェンティ養育院は「信頼できる人物からカトリーヌが死にかかっている。彼女の乳母は母乳の出ない女であった」との報告を受けた。養育院長はただちにカトリーヌを帰還させるように命じた。しかしその乳母は、「瀕死の状態で、手当ても十分ではなく、世話もこまやかにはなされていない」乳児を9月28日に至るまで返しては来なかった。

養育院の外部での乳母たちによる子どもの養育の恐るべき実態は、あまねく知られていた。親たちは田舎の無能な乳母の存在とそこへわが子が送りだされることを恐れていた。「この小さな女児をよろしくお願い致します。洗礼を受けさせ、プロヴェーガ・マッダレーナと命名しました。この子は、マットナイア（地名）出身の食肉処理業者ビエーロ・ディ・グアルティエーロの娘です。養育院の外部にこの子を送り出さないでください」。このような親のはっきりとした要望にもかかわらず、この子はジョヴァンニ・ディ・クイリーゴに貸し出された。それは、クイリーゴの女奴隷の母乳の出がよくなるように刺激を与えるためか、あるいはその女奴隷の出過ぎる母乳を授乳によって和らげるためであった。そして、その後、インノチェンティ養育院は、この女の子を2回にわ
たって乳母のもとに送り出した。2年後に、その女の子は乳母の家で亡くなっ
た。

捨て子は、その大多数が貧困に起因するものであった。しかし、その他のさ
まざまな理由からも捨て子は行われた。その中には社会的な非難を避けるため
の捨て子もあった。ある書き置きの文章は伝えている。「この女の子は、由緒
正しい家に生まれましたが、スキャンダルを避けるためにここに連れて来られ
ました。この子が善良な人の手に委ねられ、将来念入りに養育されることを、
インノチェンティ養育院で働く職員のみなさまにお願い致します」。その後で、
プレッシャ出身のパルトロメア・ディ・ジョヴァンニがインノチェンティ養育
院に出頭して来た。彼女は、その女の子は自分とマッテオとの間に生まれた子
どもであると述べた。

時期を少々さかのぼるが、1463年に捨て子に添えられていた書き置きは、次
のような文面であった。「この子アントニオ・ロレンツォは、今朝、10時に私
の所有する女奴隷から生まれました。その子は小さな着着とスワドリング布と
ともに、あなたがたのインノチェンティ養育院に預けられました。その子の父
親は、ヤーコポ・ディ・ヴィテルボという軍人です。その子の母親の名前はカ
テリーナです。彼女は私の奴隷です。この子を、長期間にわたって乳母に預け
ないでください。」

経済的貧困の重圧は、たやすく子捨てに結びついた。1464年1月、3歳にな
る男の子がインノチェンティ養育院に連れて来られた。その子に託されていた
書き置きは、暮らしの困窮を物語っている。「この子を養うための出費に耐え
られなくなったので、この子はここへ連れて来られました。母親は末亡人で、
餓死寸前の状態にあり、とてもこの子を育てることはできませんでした。その
母親の年齢は18歳で、80歳になる老人の世話もしなければなりません。同居人
の一人が家にあるすべてのものを奪い去ってしまっていた。」

同様の生活の困窮を、次の記録も伝えている。「1464年4月3日、ドメーニ
カ・フランチェスカがインノチェンティ養育院に連れて来た。その女の子
はピオンピーノ（地名）出身のシモーネ・ディ・ドメニコの娘である。父親が
ガレー船に送られているために、この子は当養育院に来ることになった。母親は貧乏のために、もはやわが子を育てることができない。

さて、1460年代は、インノチェンティ養育院がその財政的な危機の頂点に達した時期に当たる。それは、養育院内の増大する収容児数と年々さかんに増加する経費の重圧によってもたらされた。そのためにインノチェンティ養育院は、この頃からわが子を引き取りに来る親に対して養育費の支払いを要求するようになる。

「キリストの貧しき者」に対する慈善施設としてスタートしたインノチェンティ養育院は、有料のサービス施設にその性格を変えることになる。

ところではすでに、子どもを養育院から引き取った親が、感謝の気持ちからインノチェンティ養育院に対して自発的に慈善の献金を行う例は既に存在していた。「名前を明らかにしないある男性が、慈善のために、そして養育院に収容されている可哀相な子どもたちのために、われわれにお金を寄付した。それは、一年ほど前の1449年5月5日に、当養育院に預けられていた彼の子どもを、彼らに返したからであった」。同様の献金を、組織物業者のアントニオ・ディ・シモーネも行っている。この人物は、「慈善のために、そしてわれわれ養育院の出費で保育されているその男の二人の子どもたちの養育費として」、インノチェンティ養育院に対して6リラの寄付を行った。

養育院に預けられている特定の子どもに対して、名指してその子の養育費相当の金額を匿名で払うケースも見られた。インノチェンティ養育院は、1456年に「ある善意の人から、一人の特定の女の子を援助するために5リラ」を受け取った。また別の匿名の人物は、「インノチェンティ養育院に預けられている特定の男の子のための費用として15ソルディを」養育院に寄付している。

記録には、支払いをめぐっての込み入った話も記されている。叔父にあたる人物が、自分の兄弟の子どもの養育費用を乳母に支払うことに同意していた。ところが乳母にお金を渡す直前になって、その乳児が自分の兄弟の子どもではないことが判明して、彼は支払いの同意を取り消している。「11月10日に聖水瓶に、すでに洗礼を授けられた一人の男の子が置かれた。その子を連れて来た人物は、その子の親の兄弟であり、里親への支払いを自分が行うと述べた。そ
の赤ん坊は、リンネル布、羊毛の布6枚とスワドリング1枚を持っており、洗礼はすでに受けていた。その子は、月額55ソルディを支払う約束で、11月11日に乳母のもとに送られた。…1462年3月14日、叔父アントニオは、その子が自分の兄弟の子どもではないことが分かったので、乳母への支払いは断ると述べた。38）

書面による養育費の支払い契約が一般的になるにつれて、費用の返済をめぐる問題が派生する。それには、まず、預けていた子どもを引き取りに来た親に対して、それまでに要したその子の養育費用の支払いが求められる場合と、預けるために子どもを連れてきた親に対して、当初から支払いの約束と支払い方法が求められる場合があった。

さらに、多額の費用の全額を一回で返済できない場合には、さまざまな条件による分割払いの方法が考えだされた。たとえば、サン・フリアーノの商人ジョヴァンニ・ドメニコは、インノチェンティ養育院との間で、預けている自分の娘の乳母に対して44リラを支払う返済同意書を作成している。それによると、彼は、全額を2年間に分割して22リラずつを支払う。もし期限内にそれが履行されない場合には、彼の財産や所有物が没収されることを定められている。39）

1466年に、ある父親がインノチェンティ養育院に自分の娘を捨て子にした。その子の母親が死んでしまったからであった。「その父親は、授乳、離乳、養育に必要なすべての費用を支払いたいと述べた。彼は、インノチェンティ養育院に迷惑をかけないことに同意した。」そして、その費用のために必要ならば、自分の土地、財産も返済に当てることに同意した。40]

しかしながら、インノチェンティ養育院は、やみくもに誰にたいしても厳格に養育費用を請求したわけではない。貧困な親たちや資産のない両親に対しては、可能な限りの柔軟な取扱を行った。1462年に「ウルバーノ・インノチェンティの両親ジョバンニ・ダントーニオ・ディ・グアルローネと妻モンナ・レーナは、当養育院院長代理メッセージ・ジロラモに対して、インノチェンティ養育院が彼らの子どもウルバーノの養育に要した費用を返済し終えるまで、毎年、4バレルのブドウ酒を届けると約束した。」ウルバーノは、インノチェンティ
養育院において1457年から1462年までの5年間を過ごしており、その間にインノチェンティ養育院は彼のために26リラを支出していた。そこで上の約束が取り交わされた。その合意の後で、ウルバーノは親のもとに返された。

養育費の返済を物語で行っている例もある。教師のマエストロ・ラファエッロは1446年に自分の子どもニッコロ・サルヴェストロをインノチェンティ養育院に養子にした。彼は6年間後にその子に会いに行った。その時、ラファエッロは乳母のために要する費用を求められ、インノチェンティ養育院に16リラを支払った。しかしそれは返済すべき総額の4分の3の額に過ぎなかった。そこで彼は残金の支払いのために、日頃大切にして「彼が手元において絶えず読んでいる文法書」を院長に手渡した。

両親が極端な貧困にあえいでいるような場合には、インノチェンティ養育院はそのような親に対しては養育費を請求しなかった。「9月4日17時に、2歳くらいの男の子が連れられて来られ、聖水盤の上に置かれた。連れてきたのは一人の女であった。その女は、子どもはバルトロメオの息子であり、母親はモーナ・プリジダである。その子の父親は死にかかっており、母親は病院に入院してい回复べた。その男の子が身に着けていたのは、一枚のシャツ、一足の新しい靴、布地のスカートであった。...6月25日、乳母が養育院にやって来た。乳母は、その子の父親が子どもを引き取ることを望んでおり、その子を親に返してやりたいと考えている。親たちはインノチェンティ養育院に費用を支払うつもりでいるが、しかしそのお金の工面ができないでいる、とわれわれに語った。その男の子は、いまここ養育院にいる。1456年7月25日、われわれ養育院は、費用を請求することなくその子を父親に返した。父親が貧窮していることをよく承知しているからである」。

インノチェンティ養育院が親に対して養育費の請求を放棄したのは、貧困という理由にもとづく場合だけではなかった。1456年4月、インノチェンティ養育院は、4日間だけ受け入れられて養育されていた男の子を「喜んで、預けた父親に返した。養育院が、その父親が子どもに対して善良なる親であると判断したからである」。その認識の正しさは、この父親がその後に、インノチェンティ
養育院に対して4銀クロートの献金を行ったことによっても確かめられた。

捨て子としてインノチェンティ養育院に預けられる子どもたちの中には、奴隷を母親に持つ者が多かった。一家の主人とその家の女奴隷との間に生まれた子どもたちがそれである。それというのも14・5世紀のフィレンツェには多くの奴隷が存在していたからであった。ここで当時の奴隷をめぐる問題について少しだけ見ておこう。すでに11世紀にはキリスト教が西欧における一大奴隷市場となっていた。イタリアにおける家内奴隷の需要は、1348年のペスト流行後も労働力を不足によって引き起こされた。

フィレンツェでは1363年に告示されたシネリア（執政府）布告によって奴隷の輸入が正式に認められた。奴隷は、スペイン、アフリカからはもちろん、バルカン諸国、コンスタンティノーブル、キプロス、クレタ、そして特に黒海沿岸からイタリアに運び込まれた。奴隷は異教徒であることが条件とされた（de partibus et genere infidelium、異教徒ノ種族ナシ一一族ノ出身ノ者）。キリスト教徒は、奴隷としては認められなかった。この奴隷輸入の解禁以後、裕福な家庭において奴隷の姿が見られるのが一般的となる。

奴隷の多くは、9歳から10歳の子どもであった。人種的には多種多様であり、黄色い肌の吊り上がったタタール人、豊かな金髪のコーカサス人、ギリシャ人、ロシア人、グルジア人、レスキア人などであった。彼らは、一片のパンのために両親によって売られたり、水夫や侵略者にさらわれたりした子どもたちであった。ヴェネツィアやジェノヴァの港を出て来て、商人に買われ、内陸に送られた。14世紀末のトスカーナ地方においては、裕福な家庭で一人の奴隷も置いていないような家はなかった。花嫁は嫁費の一部として奴隷を連れてきた。医者は診察代の代わりに奴隷を受け取った。司祭さえも奴隷を使用人として使うことは稀ではなかった。

『プラートの商人』で有名なフランチェスコ・ディ・マルコ・ダティーニは、14世紀末の手紙で仲間の一人に奴隷購入の指示を与えている。「小さな田舎町の奴隷の娘を買ってくれたまえ。8歳から10歳の間、血統のよい子ども、とても丈夫で労働に耐えられるように身体ができていって、健康で気立てのいい子
がよい。わたしは気に入るように仕込みたいから。皿洗いと、かまどに薪とパンを運ぶような仕事をさせるだけだ。…うちにはすでに女奴隷がいて、パン作りや料理、食卓の支度がよくできるから。

幼い女奴隷の存在が上の書簡には具体的に述べられている。奴隷の所有者は、奴隷に対して「絶対的で無条件の支配権（purum et merum dominium）」を獲得した。奴隷の主人は「これを所有し、売り払い、追放し、交換し、楽しむ、貸し、遺贈し、心身を判断し、永遠に始末する」ことができた。したがって、主人が、若い女奴隷を私生児を産ませることはごく自然の成り行きであった。

マルコ・ダティーニの妻マルゲリータは、若い女奴隷たちを「あの子たちは雌の獣（femmine bestili）です」と呼んでいる。マルゲリータは、自分たち夫婦は子どもに恵まれなかったので、自分の夫が幼い少女の奴隷ルチアに産ませた娘ジネブラを自分たちの娘として育てた。しかし、当初はその子を引き取って自らの手で育てる気にならず、サンタ・マリア・ヌオーヴァ孤児院に入れたのであった。

外国人の若い女奴隷たちとトスカーナの主人たちとの間に多くの混血の私生児が誕生した。また、解放された奴隷は、その後も主人の家に残り親密な一家の成員となった。ベトラルカはこのような奴隷たちを「家庭内の敵（domestici hostes）」と呼んだ。インノチェンティ養育院の子どもたちの多くは、奴隷の母親を持つ乳幼児であった。

III 統計から見た子どもの実態

15世紀半ばのインノチェンティ養育院発足当時の実態については、単純な数値の記録しか残されていない。インノチェンティ養育院の院長の地位にあったラポート・ディ・ピュロー・バチーニは、1445年の開設から1452年までの7年間に養育院に収容されている子どもたちについての調査を行った（第1表）。この期間中に養育院に受け入れられた子ども数は537人であった。その537人のうちの34人（6.3%）のみが両親のもとに返された。それは男の子244人中の10%
であり、女の子293人のなかの3％の子どもたちである。これを男女の比率で見ると男児が圧倒的に多い。

<table>
<thead>
<tr>
<th>状態</th>
<th>男児</th>
<th>女児</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>養育院内</td>
<td>15</td>
<td>24</td>
<td>39</td>
</tr>
<tr>
<td>貸出中</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>行方不明</td>
<td>16</td>
<td>20</td>
<td>36</td>
</tr>
<tr>
<td>親に返却</td>
<td>25</td>
<td>9</td>
<td>34</td>
</tr>
<tr>
<td>養子</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>63</td>
<td>64</td>
<td>127</td>
</tr>
<tr>
<td>死亡</td>
<td>102</td>
<td>139</td>
<td>241</td>
</tr>
<tr>
<td>乳母（里子）</td>
<td>79</td>
<td>90</td>
<td>169</td>
</tr>
<tr>
<td>合 計</td>
<td>244</td>
<td>293</td>
<td>537</td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料: AOIF, Ricordanze A(XII,1), fols. 53r-55v, 6 maggio 1452.

「貸出中」とあるのは、インノチェンティ養育院に捨て子にされた新生児を、裕福な家庭の女中や女奴隷の乳の出を持続させたり、あるいは彼女たちの乳の出をよくするために貸し出すサービスを意味している。たとえば、養育院の記録によれば「女児ルカ・インノチェンティは、ベルナルド・アディマーリの女奴隷の一人の必要を満たすために、彼に貸し出された。アディマーリは、1445年9月14日にその子を返してきた。」

ところが、貸し出された新生児がしばしば行方不明になることが起きた。養育院記録は次のような事例を伝えている。「その女の子は、ピエーロ・ディ・ヤーコポ・ダ・バービの娘である。ジュリオ・ダントーニオ・ダ・ロメーナが
その子を連れて来た。そしてこの子は2週間前の2月24日に生まれたと言った。院長はその子を5月に貸し出した。そして誰にその子を貸し出したか思い出せなかったと考えていた。院長は、その子を貸し出すときに私（筆記）に何も話さなかった。[その子が養育院に返されて来たときも]（筆者）なおも院長は何も話さなかった。

新生児の貸し出しについては、通常、同一の子どもが複数回にわたって貸し出されることがなかった。一人の新生児は一回だけのお勧めを果たすのが普通であった。ところが、4回も貸し出されて、ついに死亡した新生児がいた。アニョーラ・インノチェンティと呼ばれる女の赤ん坊がその例である。彼女は、1446年6月に死亡したが、その前に4回も貸し出されていた。

アニョーラは、「メッセール・ジョヴァンニ・ボスコーリの家に滞在していたフェデリコ・ディ・ジョヴァンニ・デッラ・マーニアの子どもとして生まれた。母親は、上述のメッセール・ジョヴァンニの女奴隷ケティーナである。われわれは、この子を1445年10月15日、カルロ・ディ・フランチェスコ・ディ・メッセール・パッラ・デリ・ストロッティに貸し出した。ついでシモーネ・バルトーロ・ストラーダに貸し出した。彼の妻の女奴隷がそれを必要としていたからだ。11月18日、アニョーラをニッコロ・ディ・プランカツィオ・ルチェッライに貸し出した。さらに1446年4月16日に、その子をカンビにあるドメニコ・ボルギーニの邸宅に送りだした。6月10日に、われわれはその子を送り返させた。)

しかしながら、一般的には、貸し出された子どもほどの養育院内に留まっている乳児や田舎の乳母のもとに送りだされた赤ん坊たちよりも、はるかに死亡率は低かった。それは、貸し出される乳児が、全般的傾向として、裕福な家庭の物質的により恵まれた環境に受け入れられることになったからである。養育院記録は、その事情について次のような事例を伝えている。「われわれは、その子をルカ・ディ・ブオナコルソ・ピッティに貸し出した。彼が自分で雇っている乳母の必要を選ぶために幼児を求めていたからである。… 貸し出されたその乳児は、とてもよく世話されて養育院に帰ってきた。」同様に書記に
よる記録は、貸し出されていたナスターシャ・インノチェンティが、1451年3月24日に「丸々と売って」わが養育院に帰ってきたことを伝えている。

さて、インノチェンティ養育院は、それ以前に存在していたサン・ガッロならびにスカラの二つの施設院を1463年に吸収合併して乳幼児のみを収容する養育施設となった。したがって、インノチェンティ養育院の受入れ児基本台帳である『乳母と乳児』と合併直後のサン・ガッロならびにスカラの二施設の記録との間には、若干の記述の違いが見られる。後者のそれには受入れ時の子どもの年齢が記入されていない。そのような資料の持つ制約を考慮に入れてつつ作成されたのが1445年から1466年の約22年間にわたる次の三つの表である。

表2は、インノチェンティ養育院の年間受入れ児数の変化を示したものである。最初の10年間は、収容された乳幼児数は100人以下にとどまっている。それ以後の10年間は、収容児数がだいぶに増大して100人から200人の間を推移している。1445年から1466年までの受入れ児数2,567人について見ると、56.4%が女児であり、43.6%が男児であった。女児の収容児の優位は、嫁資の問題につながっていた。嫁資は、すでにダントによっても取り上げられていた結婚にまつわる深刻な社会的慣例であった。ダントは、『神曲』の中で「娘が生まれたからといって、父親が狼狽するようなことは 当時はまだなく、結婚の年齢も持参金の額も節度を越えるようなことはなかった」 "Non faceva, nascendo, ancor paura la figlia al padre; ch'èl tempo e la dote non fuggienn quinci e quindi la misura."（天国篇，15:103）と往時の旧きよき時代を振り返っている。女児の誕生は、裕福な階層の人々にも下層民にとっても歓迎されない出来事であった。数字は、まさに女の子を厄介者として見る当時の現実を反映している。

表3は、季節の変化にもとづく新生児のインノチェンティ養育院への受入れ児数を示したものである。22年間の受入れ児総数2,567人を、かりに均等に年平均に直すと116.6人となり、22年間の月平均では 9.7人を受け入れていることになる。しかしながら、実際には繰り返し発生する伝染病や飢餓や社会不安のために、捨て子の数は、年毎に、月毎に変化していて、この数字から一般的
表2 1445年ー66年 インノチェンティ養育院 年間受け入れ児数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>男児</th>
<th>女児</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1445</td>
<td>26</td>
<td>36</td>
<td>62</td>
</tr>
<tr>
<td>1446</td>
<td>36</td>
<td>30</td>
<td>66</td>
</tr>
<tr>
<td>1447</td>
<td>42</td>
<td>45</td>
<td>87</td>
</tr>
<tr>
<td>1448</td>
<td>34</td>
<td>38</td>
<td>72</td>
</tr>
<tr>
<td>1449</td>
<td>34</td>
<td>56</td>
<td>90</td>
</tr>
<tr>
<td>1450</td>
<td>23</td>
<td>45</td>
<td>68</td>
</tr>
<tr>
<td>1451</td>
<td>47</td>
<td>47</td>
<td>94</td>
</tr>
<tr>
<td>1452</td>
<td>40</td>
<td>50</td>
<td>90</td>
</tr>
<tr>
<td>1453</td>
<td>34</td>
<td>52</td>
<td>86</td>
</tr>
<tr>
<td>1454</td>
<td>46</td>
<td>52</td>
<td>98</td>
</tr>
<tr>
<td>1455</td>
<td>44</td>
<td>68</td>
<td>112</td>
</tr>
<tr>
<td>1456</td>
<td>52</td>
<td>63</td>
<td>115</td>
</tr>
<tr>
<td>1457</td>
<td>49</td>
<td>65</td>
<td>114</td>
</tr>
<tr>
<td>1458</td>
<td>49</td>
<td>79</td>
<td>128</td>
</tr>
<tr>
<td>1459</td>
<td>55</td>
<td>88</td>
<td>143</td>
</tr>
<tr>
<td>1460</td>
<td>69</td>
<td>80</td>
<td>149</td>
</tr>
<tr>
<td>1461</td>
<td>57</td>
<td>68</td>
<td>125</td>
</tr>
<tr>
<td>1462</td>
<td>61</td>
<td>67</td>
<td>128</td>
</tr>
<tr>
<td>1463</td>
<td>63</td>
<td>93</td>
<td>156</td>
</tr>
<tr>
<td>1464</td>
<td>74</td>
<td>115</td>
<td>189</td>
</tr>
<tr>
<td>1465</td>
<td>92</td>
<td>110</td>
<td>202</td>
</tr>
<tr>
<td>1466</td>
<td>93</td>
<td>100</td>
<td>193</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>1,119</td>
<td>1,447</td>
<td>2,567</td>
</tr>
<tr>
<td>パーセンテージ</td>
<td>43.6%</td>
<td>56.4%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
表3 1445年－66年 インノチェンティ養育院 月別受け入れ児数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>1月</th>
<th>2月</th>
<th>3月</th>
<th>4月</th>
<th>5月</th>
<th>6月</th>
<th>7月</th>
<th>8月</th>
<th>9月</th>
<th>10月</th>
<th>11月</th>
<th>12月</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1445</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1446</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>7</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1447</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>9</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1448</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>4</td>
<td>10</td>
<td>8</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>1449</td>
<td>6</td>
<td>9</td>
<td>15</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>8</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
<td>6</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1450</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1451</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>9</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>12</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>9</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1452</td>
<td>2</td>
<td>11</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>13</td>
<td>12</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>1453</td>
<td>4</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>10</td>
<td>9</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1454</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>8</td>
<td>11</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td>10</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1455</td>
<td>14</td>
<td>7</td>
<td>14</td>
<td>8</td>
<td>15</td>
<td>7</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>8</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1456</td>
<td>6</td>
<td>9</td>
<td>13</td>
<td>10</td>
<td>9</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>7</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1457</td>
<td>9</td>
<td>8</td>
<td>19</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>8</td>
<td>7</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>9</td>
<td>8</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>1458</td>
<td>7</td>
<td>11</td>
<td>14</td>
<td>11</td>
<td>15</td>
<td>4</td>
<td>13</td>
<td>10</td>
<td>13</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1459</td>
<td>13</td>
<td>10</td>
<td>20</td>
<td>10</td>
<td>15</td>
<td>14</td>
<td>9</td>
<td>13</td>
<td>5</td>
<td>17</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1460</td>
<td>10</td>
<td>16</td>
<td>13</td>
<td>13</td>
<td>12</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>7</td>
<td>12</td>
<td>9</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1461</td>
<td>11</td>
<td>5</td>
<td>15</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>8</td>
<td>11</td>
<td>10</td>
<td>8</td>
<td>13</td>
<td>8</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>1462</td>
<td>11</td>
<td>9</td>
<td>14</td>
<td>9</td>
<td>7</td>
<td>14</td>
<td>7</td>
<td>11</td>
<td>15</td>
<td>8</td>
<td>17</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>1463</td>
<td>20</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>11</td>
<td>8</td>
<td>13</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>19</td>
<td>12</td>
<td>10</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>1464</td>
<td>13</td>
<td>16</td>
<td>14</td>
<td>21</td>
<td>13</td>
<td>11</td>
<td>16</td>
<td>16</td>
<td>19</td>
<td>15</td>
<td>23</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>1465</td>
<td>14</td>
<td>12</td>
<td>21</td>
<td>12</td>
<td>26</td>
<td>13</td>
<td>20</td>
<td>18</td>
<td>21</td>
<td>14</td>
<td>14</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>1466</td>
<td>14</td>
<td>17</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>13</td>
<td>15</td>
<td>20</td>
<td>10</td>
<td>17</td>
<td>15</td>
<td>13</td>
<td>21</td>
</tr>
</tbody>
</table>

合計 196 213 283 228 244 211 221 188 207 200 208 168

資料: AOIF, Balie e Bambini A-F (XVI, 1–6).

というこの現象は，都市に住む中流の社会階層の市民たちが流行病を避けて田舎に避難したり，また近郊農村の親たちがフィレンツェ市内に近づくのを避けていたことなども反映しているものだとも読むことができる。

さて，われわれは，すでに表2からインノチェンティ養育院の受入れ児数が2,567人であり，そのうち男児が56.4%を占めていたことを見た。表4は，1452年から1466年にかけてのインノチェンティ養育院における収容児の死亡者数を示したものである。この期間の死亡者975人のうちの男児の占める割合は
表4 1452年-66年 インノチェンティ養育院 性別・場所別死亡数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>養育院</th>
<th>乳母</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>男児</td>
<td>女児</td>
<td>男児</td>
</tr>
<tr>
<td>1452</td>
<td>10</td>
<td>15</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>1453</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1454</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>1455</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>1456</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>1457</td>
<td>12</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>1458</td>
<td>7</td>
<td>14</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1459</td>
<td>10</td>
<td>17</td>
<td>11(1)</td>
</tr>
<tr>
<td>1460</td>
<td>10</td>
<td>13</td>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>1461</td>
<td>9</td>
<td>5</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>1462</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>1463</td>
<td>13</td>
<td>26</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>1464</td>
<td>9</td>
<td>29</td>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>1465</td>
<td>24</td>
<td>26</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>1466</td>
<td>28</td>
<td>37</td>
<td>23(1)</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>181</td>
<td>234</td>
<td>198(2)</td>
</tr>
</tbody>
</table>


カッコ内の数字は貸し出し中の乳児の死亡数

61% である。養育院内における死亡者数も外部の乳母に養育されていた乳児の死亡者数も、女児が男児をはるかに上回っている。この事実について、R.トレクスラーは、その有名な論文「フィレンツェにおける子殺し」においてインノチェンティ養育院では女の子の選択的な子殺しが行われたとの仮説を提示している。インノチェンティ養育院の乳児たちがぐくり抜けなければならない最初の関門は、過酷な条件のもとでとくにかっくきのびることにあった。

以上に、インノチェンティ養育院開設初期における捨て子受入れの具体的な状況について見てきた。親たちは、「捨て子」という言葉のひびきにおいて思い浮かべられる残酷な印象からは大きく隔たった態度をとっていた。彼らは,
実際には、わが子との別れをめぐって親として出来る最大限の思いやりを子どもに示した。ある親は、意を決してわが子を捨て子にしたその日のうちに、その子を連れ戻しに現れた。ある親は、事情が好転したら引き取るとの意図のもとに、わが子を緊急避難的にインノチェンティ養育院に捨てた子として預けた。寒さを防ぐために新生児を粗末な衣服にくるむことが、精一杯の可能な愛情である親もいた。インノチェンティ養育院は、まさに「キリストの貧しき者」のための慈善的施設であった。この養育院の正式の名称は、サンタ・マリア・ディ・オスペダーレ・デリ・インノチェンティである。親も、この養育院の職員も、はかなくがんぜない捨て子たちのためにサンタ・マリア（聖マリア）の執りなしを祈った（図1, 図2）。「天主の御母聖マリア、罪人なるわれらのために、今も臨終の時も祈り給え」“Sancta Maria, Mater Dei, ora pro nobis peccatoribus, nunc et in hora mortis nostrae.”の天使祝詞の祈りが、インノチェンティ養育院の活動をその根底で支えていた。

注
2) Archivio dell’Ospedale degli Innocenti di Firenze (AOIF), Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 25v, 15 ottobre 1445. “per seignio rechò uno agnus deo chon breve.” とある。「目印のために、リボンつきの神の子羊（キリスト像）を持っていた」と書記は記録している。
3) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 2v, 6 febbraio 1445. “straciuolo romagnuolo” とある。
4) P. Gavitt, Charity and Children in Renaissance Florence The Ospedale degli Innocenti, 1410-1536. Ann Arbor, 1993. p. 188.
5) AOIF, Entrata e Uscita (CXXII, 2), fol. 174r, 25 ottobre 1449.
6) op. cit., Charity and Children, p.189.
7) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fols. 4v, 142v. 13 febbraio 1445.
8) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 13v, 23 maggio 1445.
9) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 26r, 23 ottobre 1445.
10) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 29v, 4 novembre 1445.
11) AOIF, Balie e Bambini A(XVI, 1),32v, 8 dicembre 1445.
12) AOIF, Balie e Bambini C(XVI, 3), fol. 193r, 28 luglio 1457.
13) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 40r, 14 marzo 1446.
14) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 121r, 16 gennaio 1448.
15) AOIF, Balie e Bambini B(XVI, 2), fol. 71v, 144v, 24 maggio 1452.
16) AOIF, Balie e Bambini B(XVI, 2), fol. 96v, 144v, 4 novembre 1452.
   “ci fu rechato e messo nella pila el sopradetto d’eta d’anno due o circha e chi llo rechò lasciò chonesso una poliza che diceva avea nome Girolamo di Bartolomeo di Polo il Chardassiere, e ch’el padre ella moglie et i suoi figluoli erano alo spedale di Santa Maria Nuova.”
17) AOIF, Balie e Bambini E (XVI, 5), fol. 275r, 10 marzo 1465.
   “Domenicha a di 10 di marzo e a ore circha 19 ci fu rechata e messa nella pila detta fanciulla. Et recolla Domenicho di Matteo della Noratta pop. Di Sct. ... a Chalcinaia comune di Gangalandi lavoratore del prete di detto popolo. E disse che detta fanciulla era figliuolo [sic] di Piero di Giovanni lavoratore di Iacopo Ciacchi e di monna Maria sua donna ligietima e che detto Piero era malato e detta sua donna non aveva latte e che sono molti poveri e che detta fanciulla era batezata in detto nome et che essa nata di xi ... a di 13 di marzo 1465 si rende a la madre.”
18) AOIF, Balie e Bambini E(XVI, 5), fol. 292r, 9 maggio 1465.
19) AOIF, Balie e Bambini C(XVI, 3), fol. 182v, 23 maggio 1457.
20) AOIF, Balie e Bambini B(XVI, 2), fol. 90v, 19 settembre 1452.
21) AOIF, Balie e Bambini A(XVI, 1), fol. 213r, 18 settembre 1449.
22) AOIF, Balie e Bambini B(XVI, 2), fol. 68r, 5 aprile 1452.
23) AOIF, Balie e Bambini C(XVI, 3), fol. 161r, 15 marzo 1457.
24) AOIF, Balie e Bambini C(XVI, 3), fol. 203r, 7 ottobre 1457.
25) AOIF, Balie e Bambini D(XVI, 4), fol. 85v, 24 maggio 1459.
26) AOIF, Balie e Bambini E(XVI, 5), fol. 21r, 9 dicembre 1461.
27) AOIF, Balie e Bambini E(XVI, 5), fol. 50v, 11 giugno 1462.
29) AOIF, Balie e Bambini E(XVI, 5), fol. 56v, 13 luglio 1462.
30) AOIF, Balie e Bambini H(XVI, 8), fol. 25r, 4 novembre 1472.
31) AOIF, Balie e Bambini E(XVI, 5), fol. 161v, 9 dicembre 1463.
32) AOIF, Balie e Bambini B(XVI, 5), fol. 167r, 24 gennaio 1464.
33) AOIF, Balie e Bambini E(XVI, 3), fol. 187v, 3 aprile 1464.
34) AOIF, Entrata e Uscita (CXXII, 2), fol. 18v, 4 aprile 1450.
35) AOIF, Entrata e Uscita (CXXII, 2), fol. 18v, 27 aprile 1450.
36) AOIF, Entrata e Uscita (CXXII, 6), fol. 16r-16v, 23 aprile 1456.
37) Ibidem.
38) AOIF, Balie e Bambini D (XVI, 3), fol. 190v, 10 novembre 1599.
   “Adi 10 di novembre ore [ ] ci fu messo nella pila 1 fanciullo
   battezzato. Chi llo rechô disse era d’un suo fratello che pagherebbe
   il balio. Rechô 6 peze line e lane e 1 facia era batezzato in detto
   nome. — Adi 14 di marzo 1462 — detto Antonio non voleva pagare
   per detta balia perché disse avea trovato il fanciullo non esser di suo
   fratello e voleva noi la paghesimo.”
39) AOIF, Ricordanze A (XII, 1), fol. 89v, 6 marzo 1467.
   “Giovanni di Domenichochalzolaio di san Friano disse stava a
   chasa in sul Chanto della Chocholia de dare adi v di marzo 1467 L
   quarantaquattro sono per baliato d’un suo figliuolo ci mandò il
   quale a nome Francesco e Giovanni. — Il quale Giovanni sopra detti
   renderci e soddisfare indiretto esopra dittidenari, — pagandoci detta
   quantita in due paghe cioè per di qui a di vi di marzo 1468 L 22 e
   chosi per di vi di marzo 1469 L xxii e per ciò oservare obbliga se e
   sua rede e bene e nominatamente la metà d’una sue chase posto in
   via Chiara —.”
40) AOIF, Balie e Bambini F(XVI, 6), fol. 37r, 22 febbraio 1466.
41) AOIF, Ricordanze A (XII, 1), fol. 97r, 8 settembre 1463.
42) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 32v, 5 febbraio 1446.
43) AOIF, Balie e Bambini C (XVI, 3), fol. 46r, 4 settembre 1455.
44) AOIF, Balie e Bambini C (XVI, 3), fol. 86v, 19 aprile 1456.
45) Iris Origo, The Domestic Enemy: The Eastern Slaves in Tuscany in
   the Fourteenth and Fifteenth Centuries, SPECULUM, Vol.XXX, July
   1955, No.3. p. 324.
49) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 18r, 3 settembre 1445.
50) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 38v, 5 marzo 1446.
51) AOIF, Balie e Bambini A (XVI, 1), fol. 25r, 13 ottobre 1446.
52) AOIF, Balie e Bambini B (XVI, 2), fol. 10r, 134r, 202r, 25 marzo
   1451.
53) AOIF, Balie e Bambini B (XVI, 2), fol. 6r, 24 marzo 1451.
55) Richard C. Trexer, Infanticide in Florence: New Sources and First
   Results, in The Children of Renaissance Florence, Vol.1, Binghamton,
   1993, pp. 35-53.
[図1] インチチェンティの聖母
16世紀 作者不詳
（インノチェンティ養育院 所蔵）

[図2] 慈れみの聖母
16世紀 作者不詳
（インノチェンティ養育院 所蔵）

[図3] 聖遺物箱
ビーラ（聖水盤）の図が見える、
この上に捨て子を置いた。
（インノチェンティ養育院 所蔵）

[図4] 聖遺物箱
織物ギルドの紋章が見える
（インノチェンティ養育院 所蔵）